

小教室での33年間

武田 弘 (鉱物学専攻)



鉱物学教室は東大の中でもっとも小さな教室であり、理学部でもあまり表だった立場になることもなく定年を迎えられるのではないかと考えていました。ところが、最後の1年に理学部会計委員長の大任をはたさなければならなくなり、仕事のしめくりと、次の活動の場を探すべきであった期間が、あっという間に過ぎ、3月末日を迎えてしまいました。小間副委員長、司計・会計両掛長をはじめ理学部の皆様に大変お世話になり、ようやく任期を無事終えることができほっとしているところです。

理学部教授会では、積極的に発言すると何かの委員に選出される確率が高くなるということがありますが、理学部教授会で発言しなければならなくなったのは、大学院重点化にともなう小教室への影響が大きかったことも一つの原因と考えられます。助手になってすぐの3年半を、米合衆国ジョンス・ホプキンス大学と米国内務省地質調査所への休職出張とに、講師になってすぐの2年弱を米航空宇宙局 (NASA) 有人宇宙飛行センター (現ジョンソン宇宙センター) への出張に国外で過ごしましたので、あまりこの頃は理学部のお役には立てませんでした。助教授の頃は院生の時に指導していただいた定永・竹内両教授のもと

での1人の助教授であったため、理学部の各種委員会には多く顔を出す機会がありました。教務委員会や百年史編集委員会などでは大した問題も発生せず過ごせたのは幸いでした。

小さな教室の存続にかかわる問題にまき込まれたのは、大学院重点化が具体化する前後よりでした。理学総合大学院計画第3次素案 (昭和63年度原案) 作成のための理学院計画委員会基幹理学院小委員会の委員と、地球物理学施設の地球物理学教室への移行と、地球惑星科学教室への改組に関連して企画委員会の委員になってからです。昨年実現した生物科学専攻のように、地球科学関係専攻でも地球科学大専攻をつくるという案が検討されました。はじめは施設と合併した地球物理学教室が地球惑星科学教室を名のるということで議論が始まりました。我々の鉱物学教室では、第2講座が固体惑星物質科学講座としてすでに惑星科学発展の初期から活動してきていましたので、おだやかでないものがありました。結局は地球惑星物理学科 (地惑物) と気候センターが出来ただけで、地球科学大専攻はそのまま案として消えて行きました。

このような大連合を組んだ時に伝統的な系符を持つ小専攻はどうあるべきかという点について、基幹理学院小委員会の委員の先生方は次のように小教室の存在について認識して下さいました。先端的学術的研究は、しっかりしたディシプリンを持つ小分野があってはじめて可能なものであって、ある時代の傾向で大きなものにくくってしまうと、その後分野が均質化してしまい、次の時代の新しい学際的研究に対応できなくなるという考えが大切だとされました。鉱物学はよく動物・植物・鉱物というように、自然史科学の一つの柱で

あります。新興のアメリカ合衆国の分類では地球科学の一つにまとめられてしまいましたが、イギリスなどの分類では、大英自然史博物館の地球科学部門の分類に代表されるように、地球惑星科学は鉱物学部門と古生物学部門の二つにわかれ、岩石学、鉱床学、地球化学、隕石学はすべて鉱物学部門に属しています。

ともあれ、現実に進行してできた大学院重点化した理学系研究科は、理学部教授会で合意された基幹理学院第三次素案とはかなり違ったものでありました。それにもかかわらず我々が重点化実現に努力したのは、とにかく大学院重点化するのが理学部の急務であり、それ以後も講座定員、講座制度などは以前のものを運用面で続けて行けるといふ合意を信じたからであります。われわれも積極的に協力し、定員を持ち出での広域理学大講座に「惑星物質進化論大講座」を提案し、関連委員会のヒアリングの投票で1位にランクされまし

た。

しかし、後になって重点化した時の定員表（東京大学理学系研究科大学院・理学部の再編整備、平成4年1月14日）を見ますと、新制大学院発足以来、小教室に認められていた助教授定員（昭和56年4月1日の教官配当定員表）が1名削減されていきました。新しい定員配分表は理学部人事を円滑に進めるため必要なことはもとよりよく知っているつもりであります。結局のところ、この助教授定員は内部借用ということで終着をみましたが、1つのディシプリンを守り発展させる小教室にとって、この1名の定員は重要であります。鉱物学教室は私が退官しますと一気に若がえりませぬ。

この一文を書かせていただく機会に、この内部借用が不良借用として扱われないよう、最後にお願いをする次第であります。

送る言葉

田賀井 篤 平（天文学専攻）

武田弘先生は、鉱物学、結晶学、さらには惑星物質科学などの分野において多くの先駆的な輝かしい業績をあげられました。約25年前、日本ではほとんど研究者のいなかった隕石・月試料の研究を手がけられ、鉱物学の発展の一つの方向を示され、現在では講座名・書名など一般的に使われている「固体惑星物質科学」を提唱され、その分野の発展とともに歩んで来られました。例えば、炭素質隕石から原始のエコンドライトへの物質進化過程の提唱、ダイヤモンドを含むことで有名なユレーライト隕石の研究とそれに基づくユニークな生成モデル構築、特に、長年に亘るHEDエコンドライト隕石の研究は国際的にも非常に高く評価されており、この隕石グループの研究は、ほとん

ど先生によって発展させられてきたと言っても過言ではありません。母天体の原始地殻の形成進化、その内部構造のモデルは、実際に、この隕石グループの母天体であると言われている小惑星ベスタのリモートセンシングによる観測により見事に実証されました。欧米以外の研究者が提唱した名前が採用されることが少ないなかで、先生が提唱されたHED隕石という呼び名が定着していることが、先生の活躍を物語の一つと言えます。月の物質研究では、アポロの試料と南極から回収された月からきた隕石との比較を行い、アポロ以降の月研究をリードされ世界的にも高い評価を得ておりアポロ10周年の昭和54年には、米国航空宇宙局(NASA)から特別表彰を受けておられます。